



京都いのちの電話公開講演会

『『聞く』ということ 『伝える』ということ ～3・11の被災地で考える～』

京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業や実演などを行う「京まなびミーティング」。
11回目となる今回は、社会福祉法人京都いのちの電話主催の公開講演会として、株式会社京都新聞ホールディングス顧問の 齊藤 修 委員が『『聞く』ということ 『伝える』ということ』と題した講演をされました。当日は約130名の方々が参加され、熱心に聴き入っていました。

日 時 : 平成27年3月8日(日) 14時～15時30分

場 所 : 京都市男女共同参画センター(ウィングス京都)ウィングスホール

講 師 : 齊藤 修 委員(株式会社 京都新聞ホールディングス 顧問)

社会福祉法人「京都いのち電話」

自殺予防を第一使命とする電話相談機関として昭和57年に開局。昭和60年4月からは24時間体制で2年間の養成・研修・実習を受けたボランティアの相談員(現在150名)が電話相談活動を実施している。

○ はじめに

私は京都新聞社に40年以上勤め、前半の20年は現場の記者として走り回っていました。新聞記者は、読んで字の如く「新しいことを聞いて、記事にして伝える」、ざっくり言えば『聞いて、伝える』のが仕事です。しかし、『聞いて、伝える』ことは新聞の専売特許というわけではありません。「相手の話を聞いて、自分の話を伝える」、これは皆さんが普段行っているコミュニケーションと同じです。

大学生の就職活動でも、採用側が重視するポイントの一つにコミュニケーション能力があります。それは、人と人とのコミュニケーションが大変重要であり、また、その力はすぐには身に付きにくいものだからです。

今の若い世代のコミュニケーションを表すものとして、福岡大学が発表した『高校生川柳』があります。昨年、大賞をとった京都の高校2年生の作品です。

「会えたのに みんなそろって スマホ見る」
久しぶりに会ったのに会話をせず、スマホばかりいじっている…そんな若者の姿が表現されています。



若い人たちはスマホやLINEに依存し、人と面と向かって『聞いて、伝える』力が弱くなっているように思います。ましてや、東日本大震災の混乱の中では、新聞記者であっても『聞いて、伝える』ことを完璧に行うのは相当難しかったようです。

私は2011年から毎年被災地を訪れています。地元の新聞社を訪ねて伺った被災地の記者たちの悪戦苦闘ぶりをお伝えしながら、日常のコミュニケーションである『聞く』ということ、『伝える』ということについて改めて一緒に考えていきたいと思います。

<伝える>と「伝えたい」

○ 被災地への想い～阪神大震災の経験から～

2011年3月11日午後2時46分に東日本大震災は起こりました。当時、私は烏丸通を歩いていて、地震には気づきませんでした。会社へ戻ると大変な騒ぎで、テレビには全てを飲み込みながら宮城県名取市を襲う津波の映像が映し出されていました。その後、日が経つにつれ、多くの悲惨な映像がテレビで流されていましたが、私はそれを見ながら、現場を見たい、現場に立ちたいとずっと考えていました。

私がそう思ったのには、1995年1月17日に起こった阪神・淡路大震災での経験がありました。当時、私は編集局社会部デスクを務めていました。デスクは現場に出ず、現場の記者に指示を出したり、原稿を確認したりする仕事ですから、現場の情報は主にテレビでしか知ることができず、大変もどかしかった覚えがあります。震災から3日目、偶然にも神戸市内へ入ることができましたが、その時に見たもの、感じたものは、とても大きな衝撃でした。横倒しになった高層ビル、市役所は3・4階部分が潰れ、アスファルトも砂利になっていました。他にも、その場所の匂いや音など、テレビで見ているものと現場で感じるものには大きなギャップがありました。

東日本大震災から半年後、ようやくカメラマンの友人

とともに、3日かけて岩手県大船渡市から福島県南相馬市まで車で行くことができました。

最初に衝撃を受けたのは、陸前高田市の“奇跡の一本松”です。そこから振り返ると、雑草と水たまりばかりで山際まで何も無い。草のにおい、ガレキを片付けるブルドーザーの音が響く中、ただあるのはかつて建物だった敷地のコンクリートだけでした。コンクリートに触れると、半年前まで人が物をつくったり、働いたり、家族団欒があったのだろうということが手から伝わってきます。現場に立つことで初めてわかる強烈な寂寥感を覚えました。

○ 三陸新報の「伝えたい」

宮城県気仙沼市で、三陸新報社という新聞社を見つけました。三陸新報は、全8ページで発行部数2万部、気仙沼市と隣の南三陸町だけで発行されている地域紙で、気仙沼の住民の85%が読んでいます。

突然の訪問だったにも関わらず、浅倉社長と渡辺専務にお話を伺うことができました。

震災当日、高台にあった三陸新報社は津波の被害を免れましたが、水や電気等が届かず、輪転機を回せない状態でした。夕方になり、一人の記者が「社長、明日の新聞は出すのですか？」と尋ねると、社長は「それは出すでしょう」と言い切られたそうです。編集部総出で知恵を絞り、自動車のバッテリーを電源に、家庭用プリンタでA4用紙に「津波特別号」1,000枚を印刷し、社員が手分けして避難所や往来で配ったところ、皆さん奪い合うように読み入ったそうです。

記事の見出しは、『沿岸部は壊滅 気仙沼・南三陸』。地域の沿岸部が被害を受けたというメッセージです。しかし、この新聞が一番言いたかったことは「勇気を出してがんばろう」、紙面の最後に書かれているこのメッセージを読者に送りたいかっただと思います。

また、毎日発行されるのが当たり前前の新聞が、形はどうあれ通常どおり発行されている。それが読者に安心感を与えることにつながったと私は考えています。

翌日以降も、三陸新報は読者が求める情報を掲載していきました。まず、安否情報。記者が各地の避難所を回り、避難者情報を集めました。次に生活に関する情報。被災地では水や食料が不足していたため、支援物資がいつ・どこで配られるのか、病院や銀行は開いているのか、電車は動くのかといった情報をかき集めて掲載したそうです。

浅倉社長の頭の中には、いつも阪神・淡路大震災のことがあったそうです。阪神・淡路大震災の際、神戸新聞社は本社が倒壊したにもかかわらず、発生翌日も休まず



新聞を発行しました。そのことに言及され、「新聞は読者の期待がある限り発行する使命がある。何が何でも新聞は出さなければいけない。」

と仰いました。

また、社長は、神戸新聞が新聞を出せたのは京都新聞が協力したからだと言ってくださいました。当時、神戸新聞社は、印刷所は大きな被害を免れたのですが紙面を作れない状況でしたので、京都新聞が協力することになりました。神戸新聞の整理部の方3人が紙面を作るため、京都新聞の編集局に着の身着のまま駆け込んでくれたことを今でもよく覚えています。急な訪問でしたが、社長と専務に対応いただけたのは、そのことを知っていたいただいていたからでした。

私は社長の「伝えたい」という熱い使命感を伺い、改めて『伝える』ということの重要性を感じ、今、それを自分のライフワークとしているところです。

○ 石巻日日新聞の「伝えたい」

もう一件、とても苦戦しながら新聞を出された事例があります。

宮城県石巻市の石巻日日新聞社は、発行部数1万8千部、8ページの夕刊として発行されていました。津波の被害に遭い、三陸新報社同様、電気がなく、輪転機を回せなかったのですが、幸い新聞用紙が濡れずに無事だったため、用紙に直接油性ペンで記事を書いて発行されました。見た目は壁新聞のようです。

石巻日日新聞の社長は、「自分は地域のために活動する“ローカリスト”であるから、みんなが困っている時こそ新聞を出すんだ」と発行を決断されたそうです。現在、この新聞は、“紙とペンがあれば新聞は作れる”という新聞の原点を示すものとして、アメリカ ワシントンの新聞博物館（ニュージアム）に展示されています。

このように、人に何かを伝える時は、理想を持った上で「伝えたい」という熱い思いが必要です。それは新聞に限らず、日常的に人に物事を伝えるときにも同じ思いが必要だということです。



「ニュージアム」は、過去500年間に発行された3万5千点に及ぶ歴史的新聞の一面記事などを所蔵。ちなみに、日本最初の新聞は1862年発刊の「官版バタビヤ新聞」（海外紙の翻訳）。日本初の日刊新聞は、1870年発刊の「横浜毎日新聞」と言われています。

<伝える>と「伝わる」

○「客観的に伝える」が大原則



2012年2月、私は宮城県仙台市の河北新報社を訪れました。河北新報は、京都新聞と同様、宮城県の「県紙」として

県を代表する新聞で、およそ50万部発行されています。

この新聞社を訪れた理由を説明する前に、日本の新聞報道について少し説明します

日本の新聞は、記者が読者の目と耳になり、各地の出来事を実際に確かめ、読者が物事を判断するのに必要な材料を記事として伝えますが、伝え方には、客観・主観の2種類があります。「客観報道」には、「ニュース報道」と社説等の「意見報道」があります。「5W1H（いつ・どこで・だれが・何を・なぜ・どのように）」で事実のみ書かれているものが「ニュース報道」。その記事の出来事のある背景や社会制度について論説委員が意見を出すのが「意見報道」です。一方、「主観報道」は今述べたことをきっちり分けずに報道することを言います。

戦後、日本の新聞は戦時中の報道を反省し、「客観報道」で伝える方針を取っています。

○「客観報道はいらない」

ところが、東日本大震災には「客観報道はいらない」という新聞社が出てきました。河北新報社です。

被災から一週間ほどの河北新報社内のドキュメントが『河北新報のいちばん長い日』（河北新報社、2011年文芸春秋）として書籍化されていますが、それはないだろうと思った一節があります。

震災翌日の編集会議の中で、「私たちの東北が、一千年に一度と言われる大震災に直面している。無表情な『客観報道』で紙幅を埋めることなど考えられない。被災地に入った記者たちの思いと感性を全面に出したい。誰がどこに足を踏み入れ、何をみて、どう感じたかが重要だ。記者が被災地と向き合った記録として、署名記事のスタイルがその後も多用されることになる。」とあります。要は「客観報道」はいらない、「主観報道」をしろということです。

○「動かぬ子 強く抱く」

この言葉の真意を、現在、論説副委員長になられている武田さんに直接伺ってみました。

すると、武田さんは、一つの署名記事を差し出されました。

<h2>動かぬ子 強く抱く</h2> <p>12日午前8時すぎ。気仙沼市岩井崎付近の道路を車で走っていると、がれきの海と化した住宅地の方から、オレンジ色の毛布を抱えた男性3人に呼び止められた。</p> <p>「車に乗せてくれ」「避難所まで、早く出せ」</p>	<p>ヘルメット姿で疲労感をにじませた男性の一人が必死の形相で訴えてきた。毛布にくるんでいたのは子どもだった。保育園の名札が見えた。ほとんど動かない。</p> <p>発車前、付き添いとみられる男性に子どもの状態を尋ねた。首を横に振った。絶望的なのか。つらい思いでアクセルを踏んだ。</p> <p>「寒いのか?」。移動中も男性はそう言って、</p>	<p>顔を埋めるようにわが子を抱いた。2、3分後、避難所の階上中体育館に着いた。</p> <p>医師が子どもの目にペンライト、胸に聴診器を当てる。ゆっくりと首を横に振った。男性は声もなくむせび泣き、動かぬ子どもを力いっぱい抱きしめた。</p> <p>周りの人たちが、子どもの顔についた泥を丁寧に拭き取った。</p> <p>(武田俊郎、丹野綾子)</p>
---	---	--

[河北新報 2011年3月13日付]

「第三者的な立ち位置で取材する客観報道が必要なのはよくわかっているが、東日本大震災のような圧倒的な現場では、一歩退いて物事に相対するということは何も意味を成さなかった。今まで元気に遊んでいた子どもが動かなくなった。その子を抱えている親に車を出してくれと言われて、『取材中なので運ばません』と果たして言えるのかということです。被災地では、記者も、当事者としての判断、行動が求められます。記者も当事者の一人となって、必死に生きようとする被災者に対して、また、被災している読者に対して、どうすればいいのかと必死だった。だからこそ、『動かぬ子 強く抱く』という記事が生まれ、読者の共感を呼び、多くの人に伝わったのだと思います。」と武田さんは仰いました。

たしかに、客観報道では本当に伝えたいことが伝わったかどうかわかりません。「伝える」と「伝わる」は全く違う。私は、武田さんの話を聞き、一瞬にして2万人近くの方が亡くなるようなとつもない現場では、客観や主観といった枠組みを超えたところで報道しないと、本当に伝えたいことが伝わらないのかもしれないと感じました。

○ どちらが「伝わる」？—「死者」か「犠牲」か

震災から3日目、宮城県の前井知事の記者会見で、初めて亡くなった方が万単位に上ると発表されました。翌日、各紙はその発表を受けた記事を一面トップで掲載しました。

河北新報は記事の見出しを「犠牲『万単位に』」としました。しかし、同日の他紙は、各紙とも「死者」という言葉を使っています。河北新報の整理部（原稿を集約し、紙面を整理する部署）の記者も、当初「死者万単位」という見出しを考えていました。ところが、記事をじっと見ていると、様々な思いが頭を巡ってどうにも気持ちが治まらない。被災地には家族、同僚を亡くされた方がたくさんいる。亡くなった方はみんな隣人であって、それを表すのに「死者」という冷たい言葉を使えるのか。そう考えているうちに見出しを「犠牲」に変えてしまったということでした。

これは、おそらくその記者が第三者ではなく、当事者として考えて動いた結果だと思えます。



[河北新報 2011年3月14日付]

○ 作家・五木 寛之氏の「情報」

今の話から、私は作家の五木寛之さんが「情報」について講演された時のことを思い出しました。

毎年、全国の新聞社が集まり、時事問題を議論する「新聞大会」。2001年福岡大会のゲストスピーカーが五木寛之さんでした。1997年あたりをピークに、新聞は徐々に発行部数を減らし始め、新聞社としては、五木さ

んからどんな記事を書いたら売れるのかということを知りたかったのだと思います。

五木さんはこう述べられました。「情（なさ）けを報（しら）せるのが『情報』。しかし、現在の新聞はとても乾いている。だから読まれない。」

この言葉に思い当たることはないでしょうか。5W1Hで書いているような新聞は読まれない、読まれるためには「情け」すなわち「情（じょう）」のある新聞にしなければならない。これは先ほどの「動かぬ子 強く抱く」の記事や、「死者」を「犠牲」と表現する記事のことを言っているのではないのでしょうか。

ただ、新聞記事というのは、読者が生活する上での判断材料でもありますから、情に偏りすぎてはならないという側面もあります。それだけ「情」は大きな問題だと思っています。

＜伝える＞と「伝えない」

○ 悲劇の映像を「伝える」のか

次に「伝えない」ということについてお話しします。

「伝えない」ということは、例えば、個人的にも友人への発言や病気の告知の有無など、様々なことがあります。社会的には、イスラム過激派組織IS（イスラム国）についての議論があります。新聞やテレビなどのメディアは、直接イスラム国に取材するルートがないため、発信されたものについて記事や番組を作っています。それは、結果的に彼らの戦略に乗ってしまっているのではないかと、「伝えない」ことも必要なのではないかと議論です。「伝える・伝えない」ということはメディアにとってもシビアな問題です。

宮城県南三陸町の防災庁舎の写真があります。最初の写真には屋上に30人ほどの人がおり、津波がすぐそばまで迫っている様子が写っています。次の写真では、人々が鉄塔に登ったりフェンスにつかまったりしている様子が伺えますが、10人ほどしか写っていません。津波が建物の上を通り、20人の方が流されてしまったということを表しており、かなり残酷で凄惨な連続写真です。

この写真は、共同通信社が震災から3週間目に新聞各社に送信してきました。津波の恐ろしさ、そして凄惨な出来事の記録としてこの写真には大きな意味があったため、新聞各社が掲載しました。京都新聞も、残酷であるとの観点からお断りの文言付きで掲載しました。



では、河北新報はどうか。掲載にあたり、武田さんは、亡くなった方々の親族はこの写真を見てどう思うだろうかと相当悩まれました。一方で、報道部デスクは、どんな凄惨な出来事でも事実をきちんと載せなければならない、それが新聞の使命だと主張していました。武田さんは判断しかねて、南三陸町担当の現場の記者に直接尋ねてみたそうです。すると、地元の様子をよく知るその記者は、「この写真が掲載されたら地元(の気持ち、心)はもたない」と言ったそうです。それを聞いて、武田さんは写真を掲載しないという決断をされました。

私個人としては、掲載した方がよかったのではないかと考えています。なぜなら、地域の歴史として、河北新報の歴史にこの写真が残らないからです。

河北新報は「伝えない」という選択をしました。その結果、地元の読者を大事にして、被災者に寄り添う新聞であるというメッセージが多くの人に伝わったと思います。「伝えない」ことも、やはり思いを「伝える」重要な要素の一つだと思います。

<聞く>と「寄り添う」

○ 最前線で苦悩する記者たち

河北新報の26歳の男性記者は、震災でシングルマザーだった母親を亡くした女子中学生を取材することになりました。面と向かって取材する段になって、悲しみと絶望の中にいるその子にどういう言葉をかければいいのか、頭が真っ白になってこまねいていると、初めは泣きそうだった中学生が怒り出し、取材が出来なくなってしまいました。記者は、自分のやっていることがとても情けないと思ったそうです。

25歳の女性記者は、それまで先輩と共に取材し、指示を受けて記事を書いていたが、宮城県名取市の避難所へ立ち寄った際、被災者の方から、「あなたたちは取材に来て“頑張れ”と言うけれど、この避難所で泣き声が聞こえなくなったのはほんの2週間前。みんなすでに頑張っている」と言われたそうです。彼女は、それまでみんなを元気づけようと、できるだけ明るい話題ばかりを記事にしていました。でも、それは独りよがり、決して被災者に寄り添っていたわけではなかったと衝撃を受けたそうです。



このように、新聞社の幹部は記者たちに“当事者になれ”と伝えていましたが、現場の記者たちは誰もが当事者になれていただけではないということです。

○ 「聞く」から始まる共感

この話を聞いて、私自身の経験を思い出しました。滋賀県米原市(当時の米原町)の通信部にいた時、小学生が川で溺れて亡くなる事故が起きました。支局長から、その子の顔写真と母親の話を取材してくるように言われ家を訪ねると、玄関から泣き声が聞こえてきます。御家族の悲しみと絶望に触れ、どう声をかけていいかわからない気持ちになりました。こんな時に「子どもさんの顔写真を貸してくれますか。お母さんはどんなお気持ちですか。」なんて聞けるのか…。

しかし、私は玄関を開けて取材をすることができました。そこには支局長に言われたこんな言葉がありました。「新聞記事にお子さんの顔写真が掲載され、親御さんのコメントが横に載る。それはたった一行かもしれないが、その一行で二度と同じような事故があってはならないという強いメッセージを読者に送らなければならない。お子さんの顔写真と親御さんのコメントがあれば、読者にその思いがきちんと伝わる。犠牲になったお子さんと親御さんが力を貸してくれる。だから取材をするんだ。」

絶望的な状況の相手と向き合う時には、自分も同じ状況を共有しなければなりません。そしてその状況を乗り越えて物事を伝える際には、自分の仕事が社会の役に立っているという確信が必要になります。

○ 柳田 邦男さんの視点

元NHKの記者で、現在ノンフィクション作家の柳田邦男さんは、記者には「2.5人称」の視点が必要だと述べられています。

被災現場では、被災者(当事者)は1人称、その家族等が2人称、記者は3人称(第三者)になります。記者が第三者の気持ちのまま被災者に向き合った時には、被災者は冷たさを感じるでしょう。一方、記者が当事者になったのではバランス感覚を失い、記者自身が心にダメージを負って潰れてしまいます。だから柳田さんは、記者は2人称と3人称の間の「2.5人称」であれと言われているのです。

河北新報の記事を読み込むと、「2.5人称」の視点で書かれていることが感じられます。独りよがりでもなく、相手に寄り添い過ぎているわけでもない。そういう視点に立った記事を書いていたからこそ、河北新報社は菊池寛賞を受賞されたのだと思います。

河北新報社と前出の石巻日日新聞社は、東日本大震災で被災し、数々の困難に直面しながら、地元新聞社としての役割と責務を果たした、そのジャーナリズム精神が称えられ、2011年に、文学・演劇・新聞・放送・出版等、様々な文化活動において清新かつ創造的な業績をあげた個人・団体を表彰する「菊池寛賞」(第59回)を受賞されています。



○「寄り添う」は覚悟の言葉

河北新報の編集委員である寺島さんは、震災発生以来、被災地を回って被災者の話を聞かれています。行くたびに同じ方からも話を聞かれるそうですが、同じ内容でも、聞かたびに話が深く重いものになると仰っていました。話している方の顔を見ていると、深く重い話になるほど、表情の中に力がみなぎっていくのだそうです。これは寺島さんの「聞く」ということが、被災者の方を元気づけているからだと思っています。

「被災地の外から取材に来て、写真や何人かの被災者の話を持ち帰り、被災地での体験としてまわりに話す。それは単に被災地と被災者を消費しているだけだ。本当に被災地の姿を知りたいのであれば、被災地に居続け、被災地と被災者の日々の変化をずっと見ていくべきで、その変化の中に本当の被災地の姿がある。だから、記者は『寄り添う』と簡単に口にするべきではない。『寄り添う』ということは覚悟のいる言葉だ。」と寺島さんに言われたことがあります。また、「新聞もテレビも絶望なら絶望ばかり、頑張っているなら頑張っていることばかりの一面倒な報道になりがち。実際の被災地には絶望も希望も両方ある、両方を書いて初めて被災地を読者に伝えたということになる。」と釘を刺されたことを覚えています。

<聞く・伝える>と「つなぐ」

○ 大槌新聞の誕生



次は岩手県大槌町の大槌新聞です。タブロイド版（新聞の約半分の大きさ）4ページで、5,500部ほど発行され

ており、地域に全戸配布されています。

大槌町の人口は、元々15,000人ほどだったのですが、津波で1,200名もの方が犠牲となり、災害で亡くなられた方の人口比率が日本史上過去最高となる人的被害を受けました。現在、更に人口流出が進み、10,000人ぐらいいなっています。

私が初めて訪れた2013年4月、町はまだ壊滅的な状況でした。昨年再び訪ねた際は、がれきなどの撤去は進んでいましたが、町の中心部はまだ何もなく、震災当時とあまり変わらない様子でした。

大槌新聞は2012年6月、それまで新聞に携わったことのない菊池由貴子さんという女性が立ち上げました。



彼女は隣町の釜石市で震災に遭い、急いで車で家に向かいましたが、その途中に津波に襲われ、車を降り、山

を駆け上って九死に一生を得たそうです。その日は近所のお宅に泊まらせてもらい、何が起こったのかわからないまま、翌日帰宅しました。

彼女の家は高台にあったため、水害には遭いませんでしたが、インフラも止まり、ラジオを聞いているだけで、被害の詳しい状況はわからなかった。そこで、彼女は自転車で避難所を回り、その場にある新聞を全部家に持ち帰って貪るように読み、ようやく被害の概要をつかむことができたそうです。

ただ、肝心の大槌町に関する情報はほとんど載っておらず、彼女は「大槌町の情報は町民の手で、町民の目線で伝えられなければならない。自分が新聞を作って大槌町民に情報を伝えよう。」と決意します。パソコンやカメラを買ひ、記事は無料ソフトで練習し、出来上がったのが大槌新聞です。

私はこの新聞の存在を知って衝撃を受けました。「何かを伝えたい。記事を書いて読者に伝えたい。」と、私たちは新聞社に勤めるという行動をとりました。彼女は同じ思いを抱いた時、「自分で新聞をつくる」という行動をとったのです。

大槌新聞を見てみると、文字の大きさは通常の新聞の2.5倍、です・ます調で、私たちが作っているものと比べると、新聞とは言えないものでした。

しかし、2回目を読む頃には、これこそが大槌町の新聞だと思えるようになりました。人口が減少し、何もなくなってしまった町を復興させようと思ったら、すべての人々が力を合わせなければならず、共通の情報が必要になります。そのためには、子どもでも読み易くわかりやすい記事や、高齢者でも読むことができる大きな活字の媒体が必要です。そして、一番大事なまちづくりに関する情報が詰まったもの、それが大槌新聞なのです。

○ 菊池由貴子さんの「聞く」と「伝える」

翌年、私は菊池さんの取材ぶりを見に、大槌新聞を訪ねました。仮設住宅に住む人々を取材したいと彼女にお願いし、70代の女性の取材をさせていただくことができました。私が取材したかったのは、震災当日はどうされていたか、そして今どのような生活をされているのかと

ということでした。実際は、大した話をするわけではなく、お茶やみかん、大福などで厚くもてなしていただきました。取材終盤になって、女性は「仮設住宅では死にたくない。復興住宅を終の棲家としたい。」と口にされました。その時、それまでメモを取らず、相槌を打って話を聞き続けていた菊池さんが反応し、「復興住宅を終の棲家とするのですね。」と繰り返して言うと、女性の顔がパアと明るくなりました。この言葉こそが女性が本当に言いたかった言葉だったのだらうと感じました。このやり取りを見て、私は河北新報の寺島さんが言われていた『聞く』ということの重要性を、実際に見た気がしました。

三陸新報や石巻日日新聞の方々は工夫をして新聞を発行し、菊池さんは「伝えたい」と思って『伝える』ために新聞を作った。こうした熱意や『聞く』ということは既存の新聞が忘れかけていることです。私はここでも『聞く』ことと『伝える』ことを勉強し直さないといけないという思いを新たにしました。

○ 最後に ～「聞く・伝える」は「つなぐ」こと～

これまで『聞く・伝える』ことについてお話してきましたが、その本質は『つなぐ』ということではないかと思います。高校生川柳にもありましたが、人と人の関係が希薄になる中、それをつないでいくために、私たちは

『聞く・伝える』というコミュニケーションを行っているのではないのでしょうか。東日本大震災を契機に「絆」という言葉が多用されましたが、それよりは『つなぐ』がキーワードではないかと思っています。

最後に、ある被災者の方のお話です。

震災の夜、真っ暗な中、家族で一つのろうそくを囲み、不安に包まれ一夜を過ごしたそうです。明け方、バイクの音とともに郵便受けでゴトンと音がしました。新聞が配達されたのです。その方は、その音を聞いて、自分たちが社会や世の中とつながっていると感じたそうです。音だけでも安心感を『伝える』ことができ、社会と『つながる』ことが実感できると思います。

<拍手>

